

# 言葉を話さないものと読む

寺崎 恵子

## はじめに

ルソーの『エミール または教育について』は、ものごとをよく考えるある母親を喜ばせるために書かれ始めた小説体の教育論である<sup>1)</sup>。教育の本義「生を養うeducatio」や子どもの原義「言葉を話さないものinfans」が古人の言<sup>2)</sup>に掘り起こされ、語られている。この教育論は、実用性のない仮想実験だが、現実の教育事情に重ねて読まれてきた。

作者は作中の語り手「わたし」に語らせる言葉を書いた。その言葉を読者は読む。「わたし」を媒介として、作者と語り手と読者の三者が「わたし」に重複する。読む主体は、複雑な状況に巻き込まれる。わたし自身の言葉が交錯する。

読者は、この教育論を他人事として読むことができない。著者ルソーを友として手紙を送ったり、エミールと同様に自分の子を育てたりした愛読者たちがいた。実際に目の前にいない作者に、読者は、時空を超えて、親近感をおぼえる。読んでみると、自分の教育を生のはじめから考察したくなる。

これが、ルソーの目論見である。「公衆の注意をこちらに振り向けることが肝要であり、わたしの考えが間違っているとしても他の人のよい考えを生む機縁になるなら、わたしは自分の時間をむだにしたことにならない、と考える」[241:21]。

人の生は子どもに始まり、養い育てられてきた。この自然の理をルソーは古人の言葉に甦らせながら「わたし」に語らせた。過去の作者は、私たちが遠い存在であり言葉を話さないものだ。けれども、黙する彼の語りに耳を傾ける聴衆のように、私たちは読者になる。遠い「わたし」に応答するかのように、わたしが考え始めている。

人間として生きることにつながる言語活動への参加を教育論『エミール』は誘う。人生の開始と終了が言葉を話さないものに通底している。その聲に立ちあってみよう。

## 1. ルソー型読書における危険な方法

ルソーの著作には、本題以外の分野の書物からの引用が多く織り込まれている。同時代人の著作のみならず古典も含めて多様な見解を取りこんで構成されている。ルソーは、博覧強記の人である。

彼の主要著作の執筆と公刊は、ディドロ、ドランベール編集の『百科全書』の刊行に並行している。雑多な事物や事情を世界中から収集し、観察・分類・考察の手順によって類型化し体系化する知的関心が旺盛だった。事物について説明する言葉は、博物学・自然誌や辞書・百科事典の編集と公刊に、また、博物館や植物園・動物園開設に結びついた。

同時代人の知的関心は、世相を観察し取材して余談や挿話を組み込んだ迫真性のある文芸作品も産出した。言葉によるリアルな人物描写によって現実の人間関係を逆照射し、都市化が進む社会の課題を提起する小説が発展した。とくに書簡体小説が流行した。ルソーの『新エロイズ』(1761年)は大ベストセラーとなり、多くの愛読者を得た。

R.ダーントンは、当時の作者-読者関係の相互作用を「ルソー型読書」として解明した<sup>3)</sup>。作者が自作の読み方を読者に案内する。読者は、友に応答するように読む。作品は、作者と読者の共同参加の場になる。読書は、見知らぬ他者がひとつの場・トピックスに参与・共有し、自他共通のコミュニケーションになる。作品は、現実を反映した鏡として実話に近づく。自分自身を自分の目で見ることのできない読者は作中人物の関係に実際の人間関係を見立てて読む。読書は、〈文字の鏡〉を用いた自己関心や自己省察、そして自己形成に通じる。読書は、観劇に近い<sup>4)</sup>。

この読書法の発端は、彼の子どものころの読書経験に遡って把握される。『告白』<sup>5)</sup>(1765年ごろから執筆、死後1781年出版)に、その記述がある。

わたしは考える前に感じた。これは人間性の共通な成りゆきだが、わたしは他の人より強くそれを覚えた。5、6歳のころまでどうしていたのかわからず、どう読み方を習得したのかわからない。けれども、最初の読書のこと、わたしへのその影響ははっきりと思いつける。このときから、わたしの自意識が途切れなく始まった。…父とわたしは、夕食後、それら(母が遺した小説類)を読んだ。当初は、愉快的な本でわたしの読みを鍛えることだけが課題だった。ところが、関心があまりにも活発になり、わたしたちは交代しながら休みなく読み続け、毎晩、読書に熱中した。ひとつ作品が終わるまでは、やめられなかった。ときどき、明け方にツバメの声をきいて、父は恥ずかしそうに「もう寝よう。わたしの方がおまえよりも子どもだ」と言ったものだった。[8:15]

「自意識 la conscience de moi-même」が読書において開始した。「わたし(は) je」に先立ってわたしmoiが自身に同一に-même 感受された自覚の出来事である。父がわたしに読む。聞こえてくる父の声において、わたしも読む。わたしが読むとき、一緒にいる父もわたしの声において読む。交互に読みあう関心・面白さ l'intérêt (自他のあいだにある状態)<sup>6)</sup>は、さらに生々としてくる。作中人物になって読む声は自分自身と隣で聞いている相手の身の両者に反響しあい、言葉が共有されていく。「わたし自身 moi-même」は、わたしたちの声がふれあう交響に生起する。ごっこあそびさながらに、彼は、父と一緒に読書を楽しんだ。

ルソーは、この読書法を「危険な方法」だとする。「経験や反省でも決して治せない」「人生について奇妙な小説的な(荒唐無稽な)考えを抱く」という影響をもたらした[8:15-16]。前理性的存在にある子どもが、読書を通じて、雑然とした情動 emotion に揺さぶられるままに、人間の情念 passionや感情 sentimentを分からないままに感じて知った。やがて、伝記や歴史書などを読むようになって<sup>7)</sup>、彼には、危険な読書法が残った。

危険は、時間を忘れて読み耽る没頭ではなく、

生々とした関心に読み交わされる会話 entretiens における没入・吸収 absorptionにある<sup>8)</sup>。「わたしは、自分が本当のギリシャ人やローマ人だと思っていた。わたしは、読んでいた伝記の人物になりきっていた」[9:17]。読者が作中人物の立場に身をおいて、迫真の形振りでの会話・ごっこにして読むなかで、「本当の」作品世界を現出させる反転に、危険が潜む。とはいえ、人物になって読むわたしに「自由で共和的な精神」や「束縛や隷属に我慢できない奔放な自尊心の強い性格」が学ばれた[9:16]のも事実であった。

現実と仮想が交錯する読書法では、自他の境界が曖昧になってくる。危険は、「わたしは」と読んでいるわたしが作中人物と交叉するときにある。わたし自身が危ういものになり、人物の言葉によって語り出す、同期的で同調的な読みの逆説である。「わたしの方がおまえよりも子どもだ」と言った父の恥ずかしさは、大人げなく読書に耽ったなかで、亡き妻の蔵書を読む息子の声に交って彼女の声が甦ってくるように感じ<sup>9)</sup>、思わず聞き入っていた自分にふと気づいたことにもあったのだろう。

『エミール』では、子どもが読書を楽しむ時期が遅く、第3編に示されている。感覚的理性のある12歳以上になって子どもが読むのは『ロビンソン・クルーソー』である。「同様の場合に知っていなければならないあらゆることを、書物にではなく、事物に即して詳しく学び、自分がロビンソン自身だと思って」読む[455:423]、危険な読書法である。けれども、わたしの声は、言葉に没入・吸収しつつわたし自身からはみ出していく。読む声は、人物に触れてわたしの身に再帰的に響き、わたし自身が自覚される。読者は、人物と共に生きている。

「孤立した人間の立場に身を置いて考えてみて、自分の利点を自身で考えて判断する」とき、読書は、「偏見にうちかち事物の真の関係に基づく判断を整理する最も確かな方法」になる。小説は「空中楼阁」だが、自身に実感される事実と対照し比較し、考えて判断するきっかけになり、子どもが「楽しんで学ぶもの」になる[455:23]。危険な読書法は、逆説的に有効な学習法になる。

## 2. 言葉の身体性と言葉の非相称性

自分の感想や思考を言葉に表現して述べたり、言葉を用いて他者に伝えたりする。言葉を自ら・自分自身から発する他者とのコミュニケーションは、能動的で主体的な言語活動である。けれども、相手に思いが伝わらず、誤解されて話題が共有されず、通じあえないのがゆさもある。

円滑なコミュニケーションが子どもと大人とのあいだに成り立ち、互いに理解しあう愛情豊かな関係を築くことは、確かに望ましい。情報化が急速に進展する昨今では、乳幼児期にある子ども・言葉を話さないものを育てることへの関心が政策や経済の視座からも多く寄せられ注目されている。子どもと大人との、保育・教育の実践での、豊かな言語活動やコミュニケーションが重視され、その有意義な方法が探求されている<sup>10)</sup>。

子どもに「みなさん」と呼びかけていた言葉が、「ようちえんにはね、『みなさん』っていうひとがいるんだよ」と子どもに受けとめられていた内実を知る<sup>11)</sup>。子どもに伝え・伝わっているはずだと思っていた言葉が、実は、大人本位のものであり、子どもの実情に合っていないことに気づく。子どもと大人のあいだでは、言葉が通じにくい。

岡本夏木は、言葉の身体性を捉えている。そして、子どもの言語活動の重層性を「ことばにおける相称性と非相称性」として明らかにした(右図)<sup>12)</sup>。

上層は、二次的ことばである。学習されて獲得される言葉であり、標準語を主とする。「読ム」・「書ク」(文字に関するliteral)と「聞ク」・「話ス」の学習活動を通じて言葉を身につけていく。「読ム」は「聞ク」を、「書ク」は「話ス」を基にしている。受容的能動的行為の「聞ク」・「話ス」の方が、より能動性の強い「話ス」・「書ク」よりも割合が大きい。両者の間に、内言がある。それは、「思考の導き手」であり、表現されない沈思黙考のことばであり、言語活動の基幹にある。受容的な「聞ク」・「読ム」と内言が、二次的ことばの大部分を占めている。また、「話ス」は、次第に「内言的な形」になっていく。言葉で他者に伝え表現する主体的な言語活動について、「話ス」・「書ク」の積極性が評価される。けれども、言語活動の全体からみれば、「話ス」

と「書ク」(特に後者)の割合は、小さい。二次的ことばは、「非相称性」が強い。

二次的ことばの下層には、一次的事ことばがある。母語を含む口頭 oral の言葉であり、実生活で用いられることばである。受容的な「聞ク」と能動的な「話ス」の間には、独語がある。独語は、内言の基礎にある。他者に伝えようとして発せられるよりもむしろ、ふと思いついてつぶやくことばが自身に聞こえてくる。子ども自身が感じ考えていることを自分で自分に話して聞かせている。私たちは、子どもがしゃべるようになると、もっとはっきりと話をするように促して言語活動の能力を高めようとする。けれども、子どもの言葉の実際は、受容的な「聞ク」と独語の消極性と「話ス」の積極性が相生して発展すると考えられる。

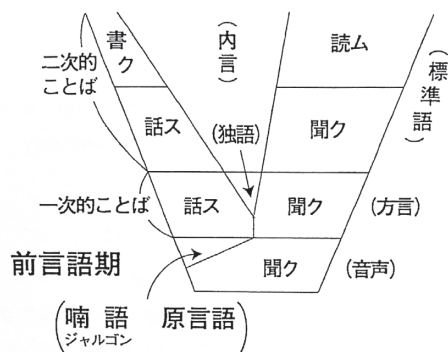


図 「ことばにおける相称性と非相称性」  
出典：岡本(2005) 196頁

最深層は「聞ク」である。人生最初期の乳児は、まさに、子どもの原義「言葉を話さないもの」[299:125]である。前言語期にある子どもの身の内外に身近な養育者の声が「しみ入る」<sup>13)</sup>。この原初的な「聞ク」は、自他融合に黙する身の、最も受容的な行為である。響いてくる声のリズムに触発されて、乳児の身に自ずと発声が起こり、非意味の喃語や原言語になっていく。養育者と乳児の「うたうコミュニケーション」<sup>14)</sup>になる。

前言語期特有の交流に、ルソーは「すべてに共通で自然なコトバ」を捉えた。それは、ふだんの会話では通用しない。「音節に区切られないが、抑揚があつてよく響き、表情が豊かである。わたしたちの言葉を用いるにつれてそれを使わなくなる

と、すっかり忘れ去られてしまう」[285:97]<sup>15)</sup>。

子どもの主体的な言語活動を理解するとき、能動的な「話す」「書く」に積極性をみる。それは、受容的能動の「読む」「聞く」の消極性を排除するものではない。発達や学習能力の面では、より上層の言語活動の積極性に意が向けられる。上層を〈図〉とするなら、下層の消極性は〈地〉である。そして、言語活動の基幹に、独語と内言がある。基幹に向かう水脈が喃語や原言語から伸びているようだ。「話す」「書く」と「聞く」「読む」の言語活動の要は、複層的な声にある。声の勢いは相称性をはみ出して非相称性に向かうようである。

### 3. ひとつの<sup>コトバ</sup>の聲に歌いあう

ホモ・ロクエンス homo loquens (言葉話す人間) に対して、動物は言葉話さないものである。言葉話さない・食べない・歩かないものに生まれ、次第に話し・食べ・歩くようになっていく子どもは、動物と人間との境界線をまたいで、その自明性を侵犯する<sup>16)</sup>。子どもは、*infans*から*puer*になる過程で、後者が前者を内含する [299:125]。人間になることの人間性は、過去の*infans*の無化にある。それは、旧態からの脱却やその消去よりも、内奥への潜勢である。言葉話す人間の根源に、言葉話さないものは隠蔽され、内蔵される。ところが、人間がうたうとき、過去が現在に流れ込み、コトバが甦る。ルソーは『告白』で述べている。

叔母は歌を不思議なほどたくさん知っていて、ふくよかな甘い声で流れるように歌った。…彼女の歌はとても魅力があり、記憶に残った。それどころか、記憶力が衰えた今でも、幼いとき以来すっかり忘れていた歌なのに、老いてゆくとともに新しく甦ってきて、言葉に表せないほどの魅力を感じる。…わたしのような老人が、こんな歌の節々をかすれてふるえる声で口ずさみ、思わず子どものように涙を流しているのを、誰が知っようか。そのなかにひとつ、節だけはちゃんとおぼえているものがある。脚韻は浮かんでくるのだが、歌詞が浮かんでこない。…もしシュゾン叔母さん以外の誰かが歌ったとわかれば、こ

の歌を思い出す楽しみも大方消え失せてしまうことは確かだ。[11:19-21]

亡き母に代わって幼い彼を育てたのが、シュゾン叔母さんだった。母なるものに抱かれ揺られて身にしみ入ったうたうた声、ルソーの記憶に伏流していた。人生の最深層の「聞く」に、うたいながら彼が下りていく。口ずさんでいると、老いた彼と幼い彼とが交叉してうたう声に共振・共鳴する。言葉話さないものとの交流に、「すべてに共通で自然なコトバ」が響く。「歌のよみがえりは、老いたルソーにおける、かつて存在した子どものよみがえりとしても体験されている」<sup>17)</sup>。

前言語期の身体の内奥にふれるコトバの交流は、原会話 proto-conversationとされる。ルソーが注目したように、原会話は音楽性が豊かであり、共リズム synrhythmiaにある<sup>18)</sup>。乳児には「リズムへの同調性がある」。「互いの呼吸のリズムにのり、それに合わせることから始まる」のであり、「互いの「息」と「生き」(呼吸と活動性)の間合い」をとって声の調子を合わせてくる<sup>19)</sup>。幼いルソーは叔母と一緒に声をあわせてリズムののって歌った。身体の内奥に潜んだ調子よい流れ rhythmの記憶が、歌詞よりも非意味の脚韻に浮かんだ<sup>20)</sup>。

「すべてに共通で自然なコトバ」の交流は、生の始まりから子どもと養育者が息を合わせて一緒に生きた共通の記憶になる。「シュゾン叔母さん以外の誰かが歌った」のでは、養育者・母なるものとの融合的な自他相即の一体において生きられたわたし自身の記憶が、コトバとともに消失して空洞化するのである。

「読む」の基底に「聞く」がある。読書の楽しみにおいて、わたし自身の意識が明らかに始まった。うたう声の流れに身を委ねた心地よさにおいて、わたし自身の生の根源的息づかいが自身に甦って感じられた。わたし自身 moi-mêmeは、養育者との交流に覚知される。わたし自身の声は、母なるものとの融合的な一体から自他相即に、そして自他共有 communになっていくなかで発生して、流動する。絶対的他者の養育者の声を「聞く」を根源として、ひとつの<sup>コトバ</sup>の聲においてわたしは生まれた。息のリズムののって「言葉話さないもの」は養

育者と歌いあう。ひとつの聲に始まる「すべてに共通で自然なコトバ」は、息の勢いを記憶に潜め保たれて、子どもの言語活動を豊かにする。

## おわりに

ルソーは、『エミール』を小説体教育論にした。「人間の学問 le science humaineを二つに分けてみるなら、一方はすべての人間に共通するもの、他方は学者に特有のものだ。後者は前者に比べて部分的で細かいものだが、わたしたちはなんとなく得た前者にはほとんど注意を払わない。考えられることなく理性の時期より前に把握されるからだ。学問的知識は、違いによって見分け認められる。代数の方程式のように（数の均衡に注意を向けて）共通の量を無と見なす」[281：90-91]。

人生の始まりにある子ども・言葉を話さないものについて、多様性に富む状況を理解するには、『百科全書』の「人間知識の系統図」に従って識別する学問的知識では難しい。流動的な「共に」を違いによって見分けるのは無意味だ。けれども、人間の生の交流を描写する小説なら、学識に「無」とみなされるような、人間の生き方に共通する記憶や、理性の前にある子ども期になんとか得られたコトバの息づかいが読みとれる。

言葉が身体的であることの本来性・自然性を魅らせるのは、聲である。誕生時のひとつの声から開いていく歌う声、聞こえる声、話す声、読む声に、言葉を話さないもののわたし自身が確かに共に生きられた記憶が息づいている。

教育の本義「生を養う」を掘り起こすことができるのは、古人の書き言葉においてである。けれども、子を養い育てることは、自明な営みとして、相変わらず、実際に行われ続けてきた。人間として生きること・教育の始源が「養う・授乳」にある事実は、教育の字義の自明性の深みに沈んでいる。学識では論外とされ、その原義は忘れ失われ、考察の対象にもならない。けれども、潜勢する本義は、養育者自身の読む声によって甦り、再生され共有される。

ルソーは教育論『エミール』を小説体にした。養育者たちが読みあいに参加して、言葉を話さないものとの交流を考えあう場を提供したのである。

## 注

- 1) Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres complètes*, t.IV, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1969. 訳文は、ルソー『エミール 上』今野一雄訳 岩波書店(改訳版)2007年を参照した。引用箇所を文中に[原文の頁：訳文の頁]で示す。なお、訳文を文脈に応じて一部改めた。
- 2) ルソーが教育の本義を見出したノニウス・マルケルス『学説集』について、白水浩信「ラテン語文法書における educareの語釈と用例 ——ノニウス・マルケルス『学説集』とエウテュス『動詞論』を中心に」『北海道大学大学院教育研究紀要』第126号 2016年を参照した。教育の意味として混同されるeducere(外に引き出す)とeducare(食料を与えて養う)だが、教育する・訓練するéduquerは前者の系譜にあり、後者とは別である。トロフェー-τροφή(栄養を与える)がラテン語educatioに訳されたが、15～16世紀に、アゴーゲー-ἀγωγή(導く)がeducatioに訳されて、トロフェーの意味がeducatioから失われた。寺崎弘昭「転回点としてのプラタルコス ——「子どもの教育について」の翻訳過程」『〈教育〉の系譜学』【私家版】2017年を参照した。
- 3) ロバート・ダーントン「読者がルソーに応える ——ロマンティックな多感性の形成」『猫の大虐殺』海保真夫、鷲見洋一訳 岩波書店 2007年(1986年)241-319頁。Robert Darnton, 'Readers Respond to Rousseau: The Fabrication of Romantic Sensitivity', *The Great Cat Massacre And Other Episodes in French Cultural History*, Basic Books, 1984, pp.215-256.
- 4) 寺崎恵子「ルソー『ダランベール氏への手紙』におけるinstruction」『教育学研究』第66巻第4号 日本教育学会 1999年 454-462頁、寺崎恵子「関心の条件と中動相」『聖学院大学論叢』26-1 2013年 63-78頁ほか。
- 5) Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres complètes*, t. I, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1959. 訳文は、ルソー『告白 上』桑原武夫訳 岩波書店 1979(1965)年を参照した。引用箇所を文中に[原文の頁：訳文の頁]で示す。なお、訳文を文脈に応じて一部改めた。
- 6) 寺崎恵子「関心の条件と中動相」(前掲)。
- 7) 亡き母の蔵書であった小説類は、7歳頃までに読み尽くされた。その後、ルソーは、母方の祖父の蔵書にあった古典や伝記、歴史書などを父と共に読んだ。[9：16]
- 8) ダーントン 前掲書 265頁、*op.cit.*, p.227. ダーントンが「こうした興味深い読書this absorption in reading」で捉えた箇所は、ルソーの原文では「こうした関心ある読書ces interessantes lectures」[9：16]である。
- 9) 父は、幼い息子に亡き妻の面影を見ていた。幼いころからルソー自身もそれを感じていたことを『告白』第一

- 巻で明らかにしている。
- 10) 国立教育政策研究所『幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究〈報告書〉』2017年。
  - 11) 菅澤順子「「みなさん」っていうひと？」『母の友』758号 2016年7月号 福音館書店 56-57頁。
  - 12) 岡本夏木「話しことばと書きことば」『コミュニケーション障害学』22(3)2005, 196頁。
  - 13) 鈴木英夫「自然と声」『思想の身体 声の巻』兵藤裕己編 春秋社 2007年 43-44頁。自動詞「しみ入る」が主客未分であり、能動と受動の融即・浸透の相にあること(即ち、中動相)については、やまだようこ「共鳴してうたうこと・自身の声生まれること」『ことばの前のことば』著作集第1巻 新曜社 2010年 321-322頁。
  - 14) やまだようこ「うたうコミュニケーションとことば」同上書 275-285頁。
  - 15) 寺崎恵子「ルソーにおける自然言語と子どもの言葉」『聖学院大学総合研究所紀要』No.62 2016年 168-191頁。
  - 16) 矢野智司「子どもという多様体のための覚書——人間／非人間の境界線にかかわる18世紀フランス思想の試み」『子ども学』第5号 萌文書林 2017年 104-126頁。
  - 17) 野崎敏「歌声と回想——ルソー、シャトーブリアン、ネルヴァル」『声と文学 拡張する身体の誘惑』平凡社 2017年 261頁。
  - 18) 渡辺久子「乳幼児と親」『そだちの科学』No.30 日本評論社 2018年 11頁。S.マロック、K.トレヴァーセン『絆の音楽性 つながりの基盤を求めて』根ヶ山光一他訳 音楽之友社 2018年。Stephan Malloch&Colwyn Trevarthen, *Communicative Musicality Exploring the basis of human companionship*, Oxford U.P., 2010 (2009)。ルソーは『言語起源論 旋律と音楽的模倣』として、言葉と音楽が同根であると考えていた。
  - 19) やまだようこ、前掲書、282-284頁。
  - 20) 鈴木情一「絵本の読み聞かせ事態における母子の音声同期化現象について」『上越教育大学研究紀要』18(2) 1999年 483-501頁。

(てらさき・けいこ 聖学院大学人文学部児童学科  
准教授)